

---

# 彼と僕と副店長

るっぴい

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

彼と僕と副店長

### 【著者名】

Z4495

### 【あらすじ】

お題は『山頂』『副店長』『カジラ』です。

これは……、挑戦だつ！

親友だった彼が死んでからいくつの年を数えただろう。もう数えるのもやめてしまった。

あの時の僕は幼くて、どうしようもなかつた。彼がどうしようもなかつたのと同じように……。

そして今年もこの時期がやつてくる。じりじりと暑い、厭になるほどの暑い熱い夏が。

彼を奪つた、最悪の季節が。

彼と知り合つたのはバイト先の靴屋だつた。同時期にバイトに応募して、同時期に受かつた。バイト先は店長を含めて三人しかいなかつたから、僕たちが仲良くなつたのは必然の帰結だつた。

彼とはくだらない話をして、くだらない遊びをして、何度か法にひつかることもした。とはいっても精々が万引き程度で、スリルを楽しめればそれでよかつたのだ。

時に遊び、時に食べ、時に笑つて、時に泣いた。

ともに街に繰り出すと、大体ゲーセンに直行した。格ゲーだと僕は強かつたけど、音ゲーでは負けっぱなしだつた。他のゲームは五分五分。カラオケにも行つたし、いろんな店をぶらぶらしたりもしたけど、大体いつも同じ店に戻つてしまつて、最後の方では諦めた。

彼とよく食べたのは大根料理だつた。あの味気ない野菜を彼は何十回と噛んでおいしそうに食べる。僕が笑うと「大根には大根のよさがあるんだ」と言つて笑つた。

笑う時の癖は、つい手を握りしめてしまつこと。まるで本音を隠して笑つているように見えて直したいと言つていた。じゃあ正反対になるんだ、って言つたら不思議そうな顔をしていた。彼は本音を

隠して笑う時に手をぴしつと伸ばすことに最後まで気がついてなかつたみたいだつた。

そしてある日、彼が泣きながら僕の家にやつてきた。何も聞かなかつた。僕らは居間でうずくまるように雑魚寝した。朝起きると彼はいなくなつていて、食卓に「悪かつた」とだけ書かれたメモが置いてあつた。

彼との親交が深まることは、生きがいのない自分にとつての目的になつていつた。もともとバイトも、ただ暇だつたから始めたのだ。バイト代はほとんどすべて銀行にしまわれたままだつた。彼と遊ぶときにも多少のお金を下ろすだけだつた。

ある時、店長が彼に言つた。

「きみ、副店長にならないかい？ なつたからといってビツなるものじやないが、君たちになにか残してやりたくてね」

僕と彼は残すんなら遺産にしてくださいと笑つたが、実際問題として彼の方はあまり裕福とは言えなかつたから、彼はその誘いを快諾した。当時彼はいくつかの金融機関に借金をして、バイト代はほとんどがその返済に充てられていたから、店を継げるというのは渡りに船だつたのだろう。靴屋の運営は、大手企業ほどではなくてもそこそこうまくいっていたから。

彼はもし副店長になれるなら、自分にこ褒美をあげたいと言つた。昔からの夢だつた、富士山に登りたいと。バイトで働きづめだつた彼も、副店長になるなら多少は生活も安定するし、バイトも減らせるからと。僕と店長はそんな彼の励みになればと、副店長に任命する一日前に彼に休みを作つた。彼は「気を遣いすぎですよ」と笑つた。

店長が店の奥にいる隙に、彼は言つた。

「帰り、ちょっと付き合つてくれよ。買いたいものがあるんだ」

次の日、彼は帰つてくることなく、彼の名前だけが街に帰つてきた。

あれからいくつ年を重ねたか、数えるのはやめてしまった。だけど調べれば何年前のことかなんてすぐにわかつてしまう。僕がしているのは憐い抵抗だ。

彼が逝つて、間もなく店長も旅立つてしまつた。副店長だつたり店を継いでほしいだつたり、生前の彼の言動を思えば死期を悟つていたのかもしない。遺族は別に強制ではないと辞したが、僕はその店を継ぐことに決めた。彼との思い出の地を失いたくはなかつた。僕はバイトを一人だけ雇つと、肃々と靴屋を経営した。家族の目には、僕はどう映つっていたのだろうか。放つておいてくれたところを見るに、気がふれたのだと思われたのかもしない。

「あ、店長。明日休みもらつていいでですかー？」

考え方をしていたせいでバイトが話しかけてきたといふことに気づくのに、ずいぶん時間がかかつてしまつた。

「どうした？ 明日何があるのか？」

「そうなんですよー。ちょっと友達と山登りに行こうって話してて」「明日？」

「そつす」

「ふーん、じゃあ一つだけ頼み事してもいいかな？」

「なんですか？」

「大根持つてつてさ、……、食べてきてよ」

あの日、彼の名前はニュースで放送された。

登頂中に、足を滑らせたらしい。打ち所が悪く、発見された時は手遅れだった。彼のそばには、彼が大事そうに持つていた大根が

落ちていた。

彼は仲間に楽しげに話していたという。

「俺さ、この大根を頂上で調理しようと思つてるんだよ。カツラ剥きにして煮るんだ。ダチが選んでくれた大根だからさ、絶対うまいと思うんだよ」

彼の命日になつて、バイトが山に行つた。

彼は帰つてこなかつたが、バイトの子は帰つてきた。

僕はその日、ぶらりと街に出て定食屋に入つた。そして頼むのだ。

「すみません、大根の煮つけ作つてもらえますか?」

その年以来、僕は毎年大根を食べる。苦くちょつぱい、どうし  
ょうもない大根を。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4495/>

---

彼と僕と副店長

2010年10月8日13時08分発行